

Ouroboros

<https://www.um.u-tokyo.ac.jp/>

Mar. 31, 2025

東京大学総合研究博物館ニュース

The University Museum, The University of Tokyo



早田文蔵 (1874－1934).

(東京大学大学院理学系研究科附属植物園 所蔵)

本館特別展示

FORMOSA —異端の植物学者 早田文藏—

池田 博

はじめに

2025年4月24日から9月5日にかけて、本館特別展示「FORMOSA —異端の植物学者 早田文藏」が開催される。本展示の主役・早田文藏（1874—1934）（以下「早田」）は、新潟県出身の植物学者であり、1904年から亡くなるまで東京帝国大学に奉職し、富士山や台湾、東南アジアの植物に関する研究を進めた。特に台湾の植物に関しては、1600種を超える植物に命名し、「台湾植物学の父」とも称せられる。早田はオーソドックスな分類学的研究だけではなく、植物の群落遷移や分類体系、あるいは植物の内部形態などに関する独自の学説も提唱した。しかし、早田の学説は当時の日本の学者や学会から好意的な評価を得ることはなかった。本特別展では、異端の植物学者とされる早田文藏が残した資料を提示しながら、早田の生涯と業績を紹介するとともに、早田の思想が現代の生物学に示唆する意義について考察したい。なお、タイトルの「FORMOSA」は、「台湾」を指すと同時に、ポルトガル語で「美しい」という意味を持ち、早田の紹介をするのに良い言葉と考えた。

1. 研究初期（～1900年）

早田は1874年12月2日に新潟県加茂町に生まれ、加茂小学校を卒業後、1887年に私立長岡学校入学、1895年に郁文館入学、1897年に第一高等学校入学を経て、1900年に東京帝国大学理科大学動植物学科に入学する。私立長岡学校を中退後、郁文館に入学するまでは加茂町で呉服屋に就業するが、その頃（1890年頃）に植物学に目覚め、独学で蘚苔類植物、特に苔類の採集・スケッチ

をおこなうとともに、当時植物学に関する唯一の専門雑誌『植物学雑誌』上に質問を投稿する。

当時、早田が採集した蘚苔類標本は、これまで東京大学総合研究博物館と国立科学博物館に約130点が確認されており、1891年から1900年の間に採集されている。早田の蘚苔類標本の特徴は、通常の蘚苔類標本（四角く折りたたんだ紙の袋に入れて整理する）と異なり、維管束植物を貼りつける台紙に標本を貼りつけ、顕微鏡で拡大した部分図のスケッチなども一緒に貼り付けたものである（図1）。

2. 富士山の植物群落研究（1905～1911年頃；1924～1929年頃）

早田は東京帝国大学に奉職した頃から、富士山の植物、特に植物群落の遷移に興味を持ち調査を進めている。早田の富士山の植物に関する研究は2期に分けられる。1期目は『富士植生帯論』（1911）を出すまで、2期目は1924年から1929年頃にかけておこなった研究である。1期目に刊行された『富士植生帯論』では、96科739種がリストされ、6つに分けた植生帯ごとにその特徴と生育する植物がリストされている。しかし早田はそれで

は満足しなかったのか、台湾の植物に関する調査・研究が一段落して以降、2期目には富士山の植生の遷移に関する独自の説（「遷移説」、「因子分配説」）を展開している。

東京大学植物標本室（TI）に収蔵されている早田が富士山で採集した標本は、1924年前後（2期目）のものがほとんどで、1期目に対応する標本は標本庫を探索しても見当たらない。1期目で早田が標本を採集していなかったとは考えにくいので、おそらく1期目で採集された標本は別のところに収蔵されているのではないかと考えられるが、現在まで確認できていない（図2）。

2015年頃に、東京大学総合研究博物館のバックヤードから早田が撮影した写真のガラス乾板が大量に出てきた。それ

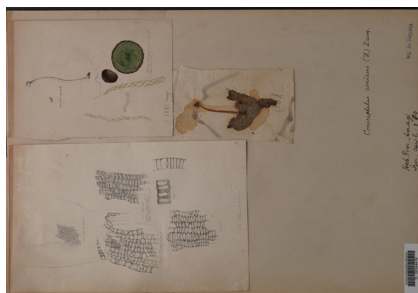


図1 早田が伊豆で採集した蘚苔類標本（TI00364476）。



図2 早田が富士山で採集した標本（フジセンニンソウ *Clematis fujisanensis* Hisauti & H.Hara のタイプ標本、TI00083667）。

らは1921年頃に早田が東南アジアで撮影したものや、1924年前後に富士山や箱根、宮島などで撮影した写真などが含まれていた。そのうち富士山周辺で撮影されたと考えられる乾板はおよそ450枚、東南アジアで撮影したと考えられる乾板がおよそ500枚であった（図3）。

3. 台湾の植物研究（1905年～1924年）

早田は1905年に台湾総督府の嘱託となり、台湾の植物に関する分類学的研究

を進める。早田は自ら台湾に赴き植物を採集するとともに、台湾総督府の嘱託や技師であった協力者の標本を精査し、『台湾植物総覧』（1906）、『台湾山地植物誌』（1908）、『台湾植物誌資料』（1911）、『台湾植物図譜 I～X』（1911～1921）といった大部の著作を発表し、それまでよく知られていなかった台湾の植物相（フロラ）を明らかにしていった。早田が新たに発表した分類群（新種、新亜種、新変種）は1600を越え、早田は「台湾植

物学の父」とも呼ばれる（図4）。

新分類群を発表する際には、その基礎となった標本（タイプ標本／基準標本）が必要である。早田が発表した新分類群のタイプ標本は、東京大学植物標本室（TI）と台湾農業部林業試験所標本館（TAIF）に収蔵されている。

早田は、できるだけタイプ標本をTIとTAIFの両方に残そうと考えたのか、タイプ標本が1枚しかない場合は、それを分割して2枚とし、1枚をTIに、1枚をTAIFに納めている例が確認される。これまでに1906年から1908年にかけて採集された15枚が確認されている。それらはすべて『台湾植物誌資料』（1911）の中で新種として報告されたものである（図5）。

4. 東南アジアの植物研究（1917年～1921年）

早田は1917年と1921年の2回にわたり、東南アジアに採集旅行に出かけている。1回目（1917年）は6月から8月にかけてトンキン（Tonkin）（現在の北ベトナム）北部から中国との国境に出て、鉄道で雲南まで行っている。2回目（1921年）は、5月から6月にかけて現在の南ベトナム南部の高原地帯で調査をおこない、9月から10月にかけてはタイ北部のチェンマイ（Cheng Mai）やドイ・ステップ（Doi Step）を中心とした地域で調査をおこなった。その後、国境を越えてラオスに入り、メコン川を舟で下りながら各地で採集をおこなっている。

早田が採集した標本は膨大な量で、2回の調査旅行で1万点に上ると言われている。早田は採集品からいくつか論文をものにしていくが、その中でもシダの新属 *Protomarattia* の発表は特筆すべきものであろう（図6）。しかし、東南アジアの調査以降、早田は体調を崩し、3回目の調査を計画しながら断念したという。早田が残した標本は長らく未整理の状態では置かれていたが、後に整理が進んだ。



図3 早田が撮影した富士山の写真（1924年撮影）。



図4 早田が記載した *Potentilla leuconota* D. Don var. *morrisonicola* Hayata の原図。

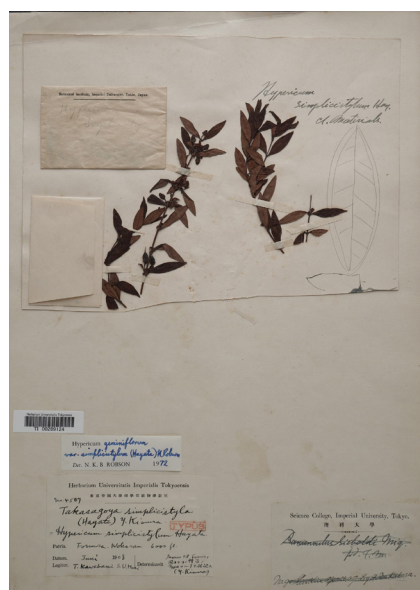


図5 東京大学植物標本室（TI）と台湾農業試験所植物標本庫（TAIF）とで切り分けられた台湾産標本（上半分，TI00289124）。



図6 早田が東南アジアで採集した標本 (*Protomarattia tonkinensis* Hayata のタイプ標本, TI00081051)。

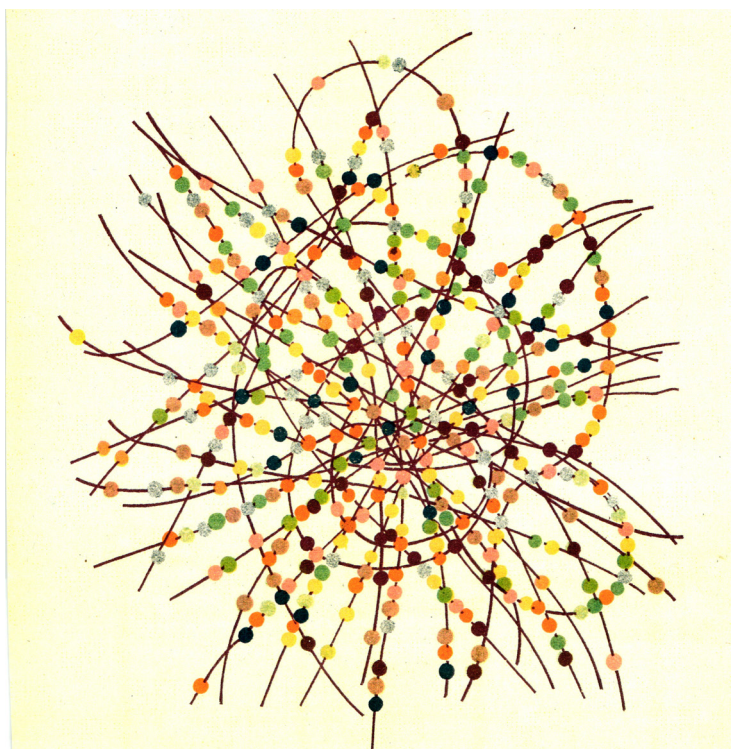


図7 早田の「動的分類系」を説明するためのネットワーク図。

5. 早田の思想

早田はその40年にわたる調査・研究の過程で、植物群落の遷移、植物の分類体系、植物の内部構造などに関する独自の解釈を進めた。

・富士山の植生の遷移

早田は富士山の植物群落に興味を持ち、東京帝国大学での研究の初期には富士山の植物、特に植生帯と植物の組成について研究を進め、1911年には『富士植生帯論』を上梓している。その後、台湾の植物についての研究が忙しくなったためか、富士山の植物の研究は中断され、再び富士山の植物について研究を再開するのは1924年頃と考えられる。ちょうど1926年に日本で第3回汎太平洋学術会議 (The Third Pan-Pacific Scientific Congress) が日本で開催され、早田も植物群落の遷移に関する発表や、参加者を連れたエクスカージョン(見学旅行)をおこなっている。

『富士植生帯論』(1911)では、富士山の植生について、標高や方角ごとに植生

帯を区分し、それぞれを構成する植物を列挙するにとどまっている。しかし、汎太平洋学術会議の報告書の中で、植生の遷移について、「遷移説」(Succession Theory)と「因子分配説」(Participation Theory)を提唱した。端的に言えば、「遷移説」は群落を構成する種の置き換わりは「内的要因」により進行し、そこには競争などはない。「因子分配説」はその「内的要因」はそもそも生来備わっているもの(「因子」)であり、因子の表出の仕方により表面上の見え方が違って見える、というものである。

・動的分類体系

早田は「因子分配説」を生物の進化にも適応し、全ての生物個体はその本質において同一であるとした。すなわち、生物が持つ因子(遺伝子)は全て同じで、現在我々が見ているのは因子の現れ方が異なるだけである、とする。生物を分類し、それを進化の筋道によって体系化させたものを分類体系と言うが、早田は直線的な進化を否定し、系統は網の目のよ

うになっている、という。因子の表出の程度は場面により変化し、時には雑種の形成により中間的なものも生成されることから、その分類体系は一定の決まったものではなく、基準を変えることにより変化するものであると考えた。早田はこれを「動的分類体系」とした。『台湾植物図譜 第10巻』(1921)には、「自然分類の原理の説明としてのゲーテの[植物変態論]中の葉の解釈」(An Interpretation of Goethe's Blatt in his "Metamorphose der Pflanzen", as an Explanation of the Principle of Natural Classification)という考察を提出し、そこには遺伝子をつなげた系状のものが複雑に絡み合ったネットワーク状の図を提出している(図7)。早田は因子分配説に立ち、動的分類体系を提唱し、例としていくつか挙げている。しかしそれをどのように広げて植物全体の分類体系を完成させるのかについての予測は難しい。



図8 早田の「中心柱説」を説明するために切り出したシダの根茎。

・中心柱説

早田は台湾の仕事が一段落した後、今度は生物間の類縁関係を調べるために、中心柱（導管や師管などの通道組織を含む組織）の解剖学的研究に取り組む。植物は、大きく生殖器官と栄養器官、それに両者をつなぐ通道システムの3つに分けることが出来る。中心柱は維管束植物の茎の中の組織であり、上に挙げた3つのうちの通道システムの役割を担う。特にシダの中心柱は属または科のレベルの類縁関係を解明するのみならず、さらに高次の小葉類（Lycopsida）と大葉類（Pteropsida）の類縁関係の解明にも役立つと考えた。早田は1918年に「支柱系（Stelar System）ノ分類學上ノ價值ニ就キテ」という論文を公表後、矢継ぎ早に中心柱に関する論文を発表する。早田は中心柱の構造を明らかにするために、ノミと彫刻刀を使って繊細な維管束を掘り出したという（図8）。

6. 終わりに

早田は1929年9月に突然の心臓発作に襲われ、自宅療養をしながら講義と執筆活動が続ける。早田が精魂を傾けて執

筆した『植物分類学 第一巻 裸子植物篇』は1933年6月に上梓されるが、翌1934年1月13日に亡くなる。執筆途中であった『植物分類学 第二巻 被子植物篇 総論』は、早田の死後、当時植物学教室の助教授であった本田正次らにより翌年の1935年2月に出版される。

早田はその40年にわたる研究生活の中で、常に「生き物とは何か」、「生きていとは何か」を自らに問いかけている。富士山、台湾、東南アジアと深く自然に入り込み、膨大な資料を収集しながら徐々に答えを見つけていく。それが当時学会の主流となりつつあった進化に関する通説と相容れないことになっても、早田は自分の主張を曲げようとはしなかった。確かに早田の「ペトリン説（生物は「ペトリン」という物質が蓄積することによって絶滅する、という説）」や、「遺伝子は永遠に不変である」といった言説は現在の科学的知識からは相容れない点はある。しかし、当時は進化について多くの「説」が提案されていること、遺伝についてもまだ正確に理解がなされていなかった時代であったことなどを考えると、進化が「自然選択」や「適者生存」といった競争や淘汰のみにより推し進められただけではないこと、進化は系統樹で示されるような直線的なものではなく、雑種形成などにより網状に進化したとすることなど、現代の科学にも相通じる部分があることを忘れてはいけない。「適者生存」や「弱肉強食」よりも「共存」、「譲り合い」といった早田の思想には、東洋哲学的思想もみられ、華嚴宗の篤信家であった両親に育てられた環境の影響も示唆されている。

早田のアイディアは当時の日本の学者、学会からは注目されることは少なく、早田の思想を継承する弟子もいなかった。だが、当時知りうる限りの知識と実際の野外での観察、資料の収集により、独自の思想を生み出す努力は、現代の科学者も見習うべき点は多いと考えられる。

最後に、早田が亡くなる前年1933年

に学生および知り合いの研究者に出した「檄文」を紹介したい。早田は1933年1月の帝国大学新聞第463号の誌上で「學問の獨立に就て」という檄文を出し、続けて3月には知己の分類学者に「敢て本邦の分類學者に檄す」という文章を送っている。その中で早田は、分類学者を強い口調で鼓舞している。

「本邦の分類学者よ、何故に逡巡するのであるか。何故に奮起せぬのであるか。系統学を討たんとする宣戦の布告は既に発せられ、進軍の喇叭は鳴り響いた。この際この秋、一人の起って呼応する者もないのは、営中尚惰眠を貪るのであるか。若しくは全軍の将士病に臥して起てぬのであるか。その名を系統学と呼ぶ伝染病に冒されて、空しく呻吟するのであるか。」（旧字体は新字体に改めた）

本特別展示の開催にあたり、大場秀章・東京大学名誉教授には多くの助言とアドバイスをいただいた。台湾農業部林業試験所からは、泣き別れ標本の片割れの標本画像を送っていただいた。理学系研究科附属植物園からは、早田の肖像画や写真、著書、標本をお借りした。また、展示デザインは洪 恒夫さんと吉田真司さん、グラフィックデザインは関岡裕さんにお任せした。展示期間中、山中慎太郎さん、中村陽一さん、中尾 暁さん、支倉千賀子さん、中村俊彦さん、大場先生には講演会で話をさせていただく。展示期間中は博物館ボランティアの方に展示会場の案内等でお世話いただく。その他、展示の準備のために多くの方に協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げる（五十音順、敬称略）：岡田美知子、鹿野研史、川北 篤、藏田愛子、小島信江、小林優香、坂本真理子、清水晶子、鐘 誌文、高橋佑征、田中三起子、寺田鮎美、寺峰 孜、梨本 真、胡 哲明、南 久美子、宮崎 卓、望月 昂、山本伸子、Diego Tavares Vasques、Manop Poopath。



（本館准教授／植物分類学）

IMT特別展示

『台湾蘭花百姿—東京展』によせて

寺田鮎美

はじめに

インターメディアテクでは、2025年2月15日から6月8日まで、2階「GREY CUBE（フォーラム）」にて、特別展示『台湾蘭花百姿—東京展』を開催する。『台湾蘭花百姿』とは、東京大学総合研究博物館と台湾の国立歴史博物館が2024年に締結した学術交流協定に基づき、両館が協働した成果となる展示企画である。東京展に続き、2025年7月8日から9月7日まで、2024年にリニューアルオープンを果たした国立歴史博物館にて『台湾蘭花百姿—台北展』が開催される。

台湾は、世界的にみても、非常に豊かな「蘭の博物誌」を紡いできた地域であるといえる。すなわち、台湾は、熱帯から寒帯までの極めて豊かな自然環境を有し、多様なラン科植物が生育することで知られる。また、台湾には、蘭を尊び、愛でるといふ、東アジア漢字文化圏に共通する文化的伝統が息づいている一方で、台湾の地域性をあらわす蘭にまつわる文化も見出される。本展示は、「台湾の蘭の博物誌」をテーマに、台湾の蘭に関する自然史および文化史に関するさまざまな資料を集め、その特性を解き明かす試みである。

企画の端緒

この展示企画が始まる直接的なきっかけは、国立歴史博物館リサーチ・アシスタントの陳奕安（CHEN Yi-an）さんと私との出会いに遡る。陳さんが、国立歴史博物館に籍を置いた社会人学生として、博士課程での研究のために東京大学に留学していた2023年3月、本郷キャンパス内の研究室で彼女のトークを聞く

機会があった。

当時、リニューアルが進められていた国立歴史博物館の今後の課題と展望について陳さんが話した内容は、歴史博物館と名のつく同館のコレクションの大半を占める美術コレクションを創造的に再解釈して活用し、どのように多層的な台湾の歴史を伝えていくかというものであった。今日の博物館の社会的役割を考えさせられる話を興味深く聞きながら、私の目に留まったのは、陳さんがスライドに示した国立歴史博物館の美術コレクションのなかに含まれていた、蘭を描いた絵画であった。

私はその頃、2021年にインターメディアテクで開催した特別展示『蘭花百姿—東京大学植物画コレクションより』と2022年に刊行した同名の書籍にて取り組んだ「蘭の博物誌」というテーマに手応えを感じ、世界のさまざまな地域で「蘭の博物誌」の展示企画を展開してみたいと考えていた。そこで、陳さんに、「台湾の蘭の博物誌」というテーマで、蘭を通じて、文化史だけでなく自然史も対象として台湾の歴史を読み解く展示のアイデアを一緒に考えてみませんか」と声をかけたところ、陳さんはその誘いに喜んで応じてくれることになった。

日台研究者の協働

陳さんは早速、国立歴史博物館コレクションのなかの蘭に関わる作品を中心に調べて、情報を共有してくれた。その最初に送られてきたリストは、絵画作品だけで100点近くあり、その数は、私の予想をはるかに上回っていた。その後、展示部長の翟振孝（CHAI Chen-hsiao）さんをはじめ、国立歴史博物館の他の

キュレーターらも本展示企画チームに加わり、より幅広い時代やジャンルの同館コレクションから展示物候補を選定していった。

東京大学コレクションについても、池田博先生（本館准教授）、清水晶子さん（大学院農学生命科学研究科森林科学専攻森林植物学研究室特任研究員）、藏田愛子さん（大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻助教）、ジエーゴ・タヴァレス・ヴァスケスさん（大学院理学系研究科附属植物園特任助教）らの協力を得て、東京大学植物標本室（TI）が所蔵する台湾ラン科植物標本や植物画の調査を進めていった。また、学内図書館からは、台湾の蘭の写真やデザインに関わる文化史資料も探し出した。

さらに、陳さんと私をはじめ、展示企画チームメンバーが、台湾に所在する植物標本や植物画等の資料を現地にて共同で調査する機会にも恵まれた。農業部林業試験所植物標本館、国立台湾大学植物標本館、国立台湾大学図書館、国立公共資訊図書館等の調査先では、多くの関係者から貴重な助言を得ることができた。このように、さまざまな日台研究者の協働により、「台湾の蘭の博物誌」が形づくられていった。

東京展・台北展と総合図録

展示準備の過程で、われわれ展示企画チームは、台湾の蘭の自然史・文化史の想像以上の豊かさを知ることになった。その驚きと感動をより多くの人に伝えるべく、展示は、いわゆるパッケージ化された巡回展ではなく、東京（総合研究博物館・インターメディアテク）と台北（国立歴史博物館）の二箇所にて、会場とな

る博物館双方のコレクションを活かし、それぞれ構成することにした。

東京展の特徴は、次節で紹介する通りである。一方、台北展の中心となるのは、国立歴史博物館のコレクションより、清王朝から、日本統治時代、戦後に至るまでの蘭をモチーフとした書画や美術作品である。そこに、台湾に所在する、台湾の蘭の自然史・文化史資料として、国立台湾大学図書館の田代安定文庫の手記やスケッチ、王仁禮・林讚標の描いたラン科植物画原画、同大学植物標本館のラン科植物標本、国立公共資訊図書館の川澄理三郎『蘭譜』などが加わる。

そして、図録は、二会場の展示内容を総合的に反映する章立てとして編集をおこない、総合研究博物館と国立歴史博物館が共同で出版することになった。

東京展の特徴

東京展の会場は、東京大学コレクションを展示の中心にした、4つのパートから構成される。

パート1「日本人植物学者による台湾植物調査」では、日本統治時代（1895–1945）に台湾総督府で仕事をした、田代安定、早田文蔵、瀬川孝吉という3人の植物学者に主に光を当て、台湾ラン科植物標本や植物図譜を展示している（図1）。本来は研究資料である標本を多数紹介できるのは、植物標本室をもつ大学博物館ならではの展示であるといえるだろう。また、早田文蔵の著した『臺灣植

物図譜』の図版（速水不染原画）と標本を組み合わせた展示では、台湾蘭を科学的に観察するとともに、その美しさを観賞することができる。

パート2「台湾蘭の栽培と観賞」では、写真や美術・デザイン関係の資料を紹介している（図2）。日本統治時代には、台湾産胡蝶蘭やさまざまな熱帯蘭の愛好が人々の間で広がりを見せた。台北植物園にて撮影された熱帯蘭写真や、台湾総督府が発行した記念絵葉書や出版物に表された胡蝶蘭のモチーフは、それを顕著に反映している。

パート3「東洋蘭の図譜」では、台湾のみならず、日本を含む東アジアの漢字文化圏における蘭とわれわれとの深い関係性に着目した。江戸時代、近代の植物学以前に植物研究の基礎を築いた本草学の書物には、さまざまな蘭の形や特徴が描き留められている。また、四君子の一つとして人気を誇ってきた、美術における伝統的な蘭（シュンラン属）の表現は、絵手本を通じて繰り返され、習得されていた。

パート4「台湾蘭と自然・芸術・人間」は、さまざまな角度から、台湾の多種多様な蘭に光を当てている。山田壽雄作ラン科植物画は、今回が初公開となる総合研究博物館新規収蔵資料である（図3）。そのなかから、台湾蘭が戦前の日本で栽培されて花をつけた記録となるものを選び出した。中島睦子の『日本ラン科植物図譜』原図からは、台湾と共通する植物

相をもつ沖縄に生育する蘭を展示した。そのほか、映像コンテンツとして、台湾野生蘭の現代写真、原住民族ツォウ族の蘭に関係する風習、国立歴史博物館所蔵の蘭をモチーフとした美術作品も、このパートにて紹介している。

おわりに

東京展では、インターメディアテクのオリジナルデザインで構成した「台湾の蘭の博物誌」の展示空間をより充実させるために、総合図録に掲載していない展示物も取り込んでいる。また、一部の植物画およびおし葉標本全点は、前期（2月15日から4月13日）および後期（4月15日から6月8日）で展示替えをおこなう。東京展でしか味わえない展示を楽しんでいただければ幸いである。

東京展や図録を見て、本展示に興味をもってくださった方には、ぜひ台北展会場も訪れてみてほしい。台北展は、台湾に所在する、台湾の蘭に関する美術作品や自然史・文化史資料のオリジナルが、類をみない規模で一堂に会する貴重な機会となることは間違いない。

『台湾蘭花百姿』は、館内外のさまざまな方々の協力により、実現が叶った。本稿の最後に、展示企画チームを代表して、本展示にお力添えいただいた日台関係者の皆様に、心より感謝申し上げたい。



（本館インターメディアテク寄付研究部門
特任准教授／芸術学・博物館学）



図1 東京展会場風景（パート1）。



図2 東京展会場風景（パート2）。



図3 初公開の山田壽雄作ラン科植物画。

建築模型コレクション

建築模型コレクション

松本文夫

標本資料報告第137号『東京大学総合研究博物館所蔵 建築模型コレクション』が刊行された。本報告に掲載された建築模型について、制作の経緯と資料の概要を記したい。

当館の建築模型コレクションは東京大学の歴史的な施設建築の模型から始まった。1997年の『東京大学創立120周年記念 東京大学展』で公開された、東京大学逸失建築群等の木製模型である。西野嘉章名誉教授らの企画により、関東大震災で失われた東京大学の施設建築5棟および震災を生き延びて現存する旧東京医学校本館（現総合研究博物館小石川分館）の計6棟の建築について、大学施設部に残された古い設計図をもとに復元模型が制作された。イタリアの名匠ジョヴァンニ・サッキの工房が協力し、ルネサンス以来の伝統的な木工技術の粋を尽くした精巧な建築模型が完成した。

その後約10年を経て、建築模型コレクションが拡充される機会がうまれた。教養学部前期課程の授業「建築デザイン実習」の履修学生から建築模型を制作する申し出があり、ル・コルビュジエ設計のサヴォア邸の模型を作ることになった。模型制作を通して建築への理解を深めるプロセスは、その後の「模型制作ゼミ」の活動の出発点となり、成果を公開する展示企画の原型を形成した。こうして2008年度の特別展示『UMUTオープンラボ ― 建築模型の博物都市』において、東京大学の学生らおよび一部の模型専門家によって、80点以上の建築模型が制作された。展示室を「オープンラボ」と称する研究室に見立て、学生らによる模型制作の現場をそのまま公開する「動態展示」を実践した。展示物は会期中に

徐々に増えていったのである。

オープンラボを経て、模型制作ゼミはその後も継続した。有志学生らの活動で生みだされた建築模型の数々は、小石川分館における2013年末からの常設展示『建築博物誌／アーキテクトニカ』で公開された。建築ミュージアムとしての小石川分館では「アーキテクチャ（構成原理）」を共通テーマとして、その理念をさまざまな学問分野に拡張した。「建築博物教室」では諸分野の研究者がアーキテクチャに関わる多様なモバイル展示を実現した。一方で模型制作では「集成建築」や「空間標本」や「3D造形」などの新しい表現手法にも取り組んだ。

小石川分館は、耐震診断と建物改修のために2021年初頭から長期休館となった。公開停止の状況を受けて、本郷本館で2021～2023年に特別展示『空間博物学の新展開／UMUT SPATIUM』が開催された。当展では建築を構成する「空間」の可能性に注目した。空間の収集/保存/活用を企図して新たな模型コンテンツを導入し、あわせて小石川分館に収蔵されている多くの建築模型を本館に移設して展示した。標本資料報告はこれらのコレクションの総合的な記録である。

建築模型コレクションの模型総数は215点である。カテゴリ別に内訳を示すと、A：ミュージアム建築（40点）、B：ミュージアム以外の一般建築（76点）、C：東京大学建築（10点）、D：その他（4点）、E：建築の記憶（35点）、F：20世紀の建築（公共建築）（18点）、G：20世紀の建築（住宅建築）（18点）、H：空間標本（14点（実質94点））となる。また模型の製法で区分すると、「ハンドメイドの模型」（144点）および「3Dプリンタによる模

型」（71点）となる。

コレクションを形成する上での基本的な方針は、対象となる建築の「多様性」とその模型表現における「共通性」である。すなわち、模型の収集と展示によって建築のアイディアとフォルムの多様性を一覽的に伝えること、また、模型の縮尺や色彩など表現仕様に共通性をもたせて比較観察を容易にすることを考えている。さらに模型化する建築の選定においては、設計者や計画者、年代や様式、ビルディングタイプに関してまだコレクションに含まれていない作品を優先し、またゼミメンバーが模型化したいと考える作品であることを重視している。以下に各カテゴリーにおける建築の特徴や主要作品を紹介する。（）内の記号は模型番号を示す。

A：ミュージアム建築 オープンラボの活動を開始したとき、模型化の候補にまず上がったのはミュージアム建築であった。博物館や美術館はコレクションの増大を背景として18世紀以降に興隆した文化施設であり、その建築形態、空間構成、動線計画は多様性に富む。初期の原型的なミュージアムから現代の個性的なミュージアムまでの40点の作品が縮尺1:300で制作された。「アルテス・ムゼウム(A001)」は初期の専用ミュージアム建築で回遊型の動線をもつ原型的な施設である。「ニュー・ナショナル・ギャラリー(A009)」は広大な方形空間の中で自由型の動線が展開する。「ヘドマルク博物館(A012)」は異なる時代の建築がそれぞれの特質を維持しながら共存する。「ビルバオ・グッゲンハイム美術館(A027)」は固有の曲面フォルムで美術館建築のアート化の嚆矢となった。

B：一般建築 ミュージアム以外の建築は一般建築のカテゴリに入る。全76点のうち45点は住宅（集合住宅を含む）であり、残り31点は公共建築、宗教建築、オフィスなどである。ここでは代表的な三つの住宅建築について、スタイル（様式）、タイプ（類型）、モデル（規範）の観点から取り上げる。「ヴィラ・ロトンダ(B005)」はパラディオが設計した邸宅で、強い対称性と求心性をもち、ルネサンス期の様式として多大な影響力をもった。「サヴォア邸(B027)」はル・コルビュジエの「近代建築の五原則」の類型的な展開可能性を明示した。「ファンズワース邸(B034)」はミース・ファン・デル・ローエの「ユニヴァーサル・スペース」の理念を具現化した建築で、モダニズム建築の重要なモデル（規範）の一つとなった。

住宅以外の建築では、ドームの連鎖による大空間を実現した「ハギア・ソフィア(B001)」、垂直優先の構造理念を軸組で示した「浄土寺浄土堂(B003)」、デザインの洗練がモダニズムの先駆に結び付けられた「桂離宮(B008)」、鉄筋コンクリート造における光の導入を革新した「ル・ランシーの教会堂(B018)」、設計をプロセスの計画にとらえた「大分県立大分図書館(B047)」、剛だけでない柔の構造の可能性を示した「木造三重塔(B058)」、式年造替による常若の永続性を維持する「伊勢神宮内宮正殿(B075)」などがある。

C：東京大学建築 当館の建築模型コレクションの出発点となった、東京大学逸失建築群等の復元模型を含む。ジョヴァンニ・サッキによって模型で復元された建築のうち、「東京帝国大学医科大学法医学教室(C001)」、「旧東京医学校本館(C002)」、「東京帝国大学工科大学造船学・造兵学・土木学教室(C004)」、「東京帝国大学法科大学講義室(C005)」の4棟は、東京帝国大学技師をつとめた山口孝吉が設計したものである（旧東京医学校本館は改修設計）。震災前の本郷キャンパスでは、建築様式の多様性があり、後に営繕課長となった山口は、先達の様式と個性を巧みに使い分けながら施設整備に取り組んだ。本作品群は山口孝吉作品の貴重なコレクションでもある。

D：その他 特別な表現意図をもった模型など、他の区分に該当しないものを含めている。「住居の歴史(D003)」は当館小石川分館で2018年に開催された大場秀章名誉教授による建築博物教室「生物共生のアーキテクチャー——多様な生き物と共生する建築を考える」で公開された。人類の太古から現代に至る住居の諸形式を時計回りに並べている。洞穴、始原の小屋、竪穴式住居、高床式住居、組積造建築、ドミノ・システムである。これらに続くものとして、自然と共生する建築の可能性が大場先生から提起された。「近接性の空間(D004)」は、COVID-19のパンデミック後の社会空間モデルである。中央の空間は主人公X氏の部屋、その右側に浮かぶのは他者の空間群であり、その所在地はバラバラであるが、Zoom等のシステムを通じて「関係の空間」が成立している。一方、左側にあるのはX氏が所属する学校、職場、家族などのグループであり、これらは「場所の空間」として一つの建築にまとめられている。このように、現代社会には「場所の空間」と「関係の空間」が共存しており、距離とつながりから「近接性の再構築」を考えることができる。

E：建築の記憶 筆者の記憶に残る古今の建築からなる「集成建築」の模型である。カルナック神殿(E001)、ポン・デュ・ガール(E005)、東大寺南大門(E010)、ランス大聖堂(E011)、スカイハウス(E028)など内外30以上の建築が、おおむね古い順に下から組み上げられた。ファサード、外観形態、内部空間、骨格構造といった、その建築の特徴的な部分を1：300の同一縮尺で再現して立体的にカラーージュしている。ここで選択された建築群は、建築史の流れを網羅的にカバーするものではない。しかし時代の推移とともに、建築の「物象」においては量塊的なものから繊細なものへ、「空間」においては閉じたものから開かれたものへ、という大きな変化の流れが見えてくる。

F/G：20世紀の建築 「20世紀の建築」と題する集成建築の模型2点を制作した。「F 20世紀の建築（公共建築編）(F000)」は縮尺1:300の公共建築18棟からなり、「G 20世紀の建築（住宅建築編）(G000)」は縮尺1：100の住宅建築18棟からなる。これらの題材は20世紀の建築における設計理念と設計者の多様性を考慮して選定した。いずれも3Dプリンターで出力した建築模型を土台に配置している。本模型の研究では、20世紀の建築の設計理念を、空間、時間、環境、技術、文化という6つの区分に整理して検討した。主な建築は、公共建築編ではオーストリア郵便貯金局(F001)、ストックホルム市立図書館(F005)、ルサコフ労働者クラブ(F006)、ダンテウム(F008)など。住宅建築編では、ドミノ・ハウス(G001)、メーリニコフ自邸(G004)、イームズ自邸(G008)、立体最小限住宅No.3(G009)などである。

H：空間標本 「空間標本」とは「建築や都市のなかから取り出された空間の部分」である。人間が体験するさまざまな空間を「標本」として収集記録し、今後の研究やデザインに活かすことを企図している。建築空間を原寸で収集することは容易ではないが、模型のレベルから試行することはできる。

模型は未だに存在しない事物のイメージを示し、一方では既に存在する事物を記録する。すなわち、模型は事物の予示と再現、あるいは創造と保存に関わる。この両面において、模型が建築の研究・教育・実務に果たす役割は大きい。建築模型は建造物の実体を伝えるとともに、その意図や理念を胚胎しうる素材である。

最後に、当建築模型コレクションの制作に関与された多くの方々にあらためて深く御礼を申し上げる。

最後に、当建築模型コレクションの制作に関与された多くの方々にあらためて深く御礼を申し上げる。

最後に、当建築模型コレクションの制作に関与された多くの方々にあらためて深く御礼を申し上げる。

Ouroboros

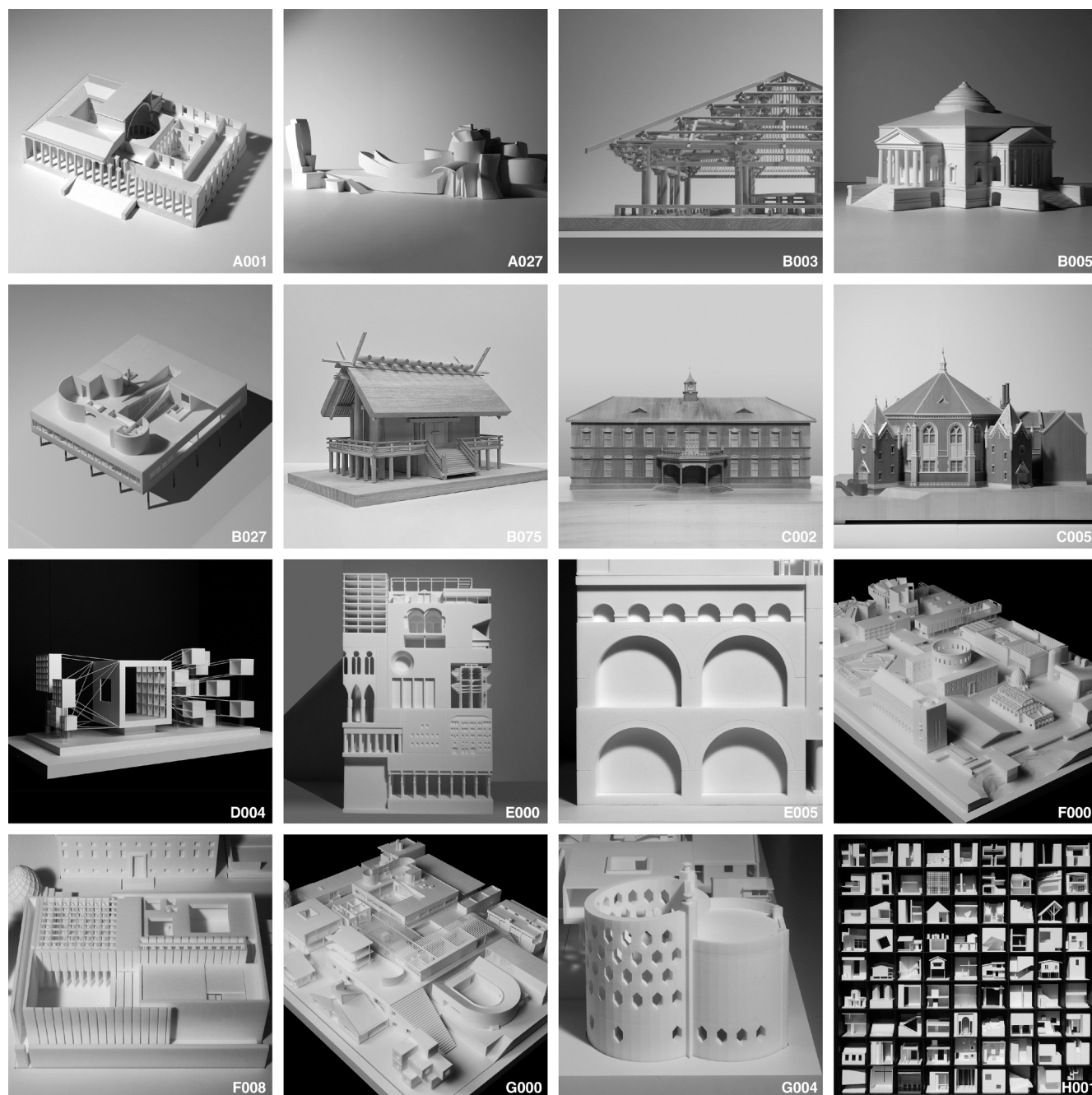


図1 建築模型コレクションより

A001 アルテス・ムゼウム、A027 ビルバオ・グッゲンハイム美術館、B003 浄土寺浄土堂、B005 ヴィラ・ロトンダ、B027 サヴォア邸、B075 伊勢神宮内宮正殿、C002 旧東京医学校本館、C005 東京帝国大学法科大学講義室、D004 近接性の空間、E000 建築の記憶、E005 ポン・デュ・ガール、F000 20世紀の建築(公共建築編)、F008 ダンテウム、G000 20世紀の建築(住宅建築編)、G004 メーリニコフ自邸、H001 空間標本

参考文献：松本文夫（2025）『東京大学総合研究博物館所蔵 建築模型コレクション』東京大学総合研究博物館標本資料報告No.137.



（本館特任教授／建築学）

学芸員専修コース

動物標本を探り語らう

工藤光平

はじめに

東京大学総合研究博物館が開催する「学芸員専修コース」は、1996年に創設されて以来、博物館の専門職員に向けたリカレント教育の場として進化を続けています。このコースは、博物館学における実践的な知識の提供と、新しい研究成果や博物館技術の紹介を目的としており、自然史・文化史を超えた「博物学的視点」を育む場として位置付けられています。過去のプログラムでは、デジタル技術の導入、展示企画の革新、標本管理や活用の実践的手法など、時代のニーズに応じたテーマを取り上げてきました。

これまでのコースでは、標本の扱いに関する内容が含まれることもありましたが、標本作製そのものをテーマに据え、動物標本の作製プロセスに焦点を当てたプログラムは限られていました。一部の年度では「自然の多様性・文化の多義性：骨と骨格標本」（1999年度）や「動物のかたちの見方」（2014年度）といったテーマで標本に触れる実習が行われたものの、標本作製全般を体系的に学ぶ機会が限定的でした。

2024年度のコース「動物標本を探り語らう」は、動物標本に関する技術および学術的な視点を包括的に学ぶことを

目指した点で、従来のコース内容とは異なる特色をもっています。具体的には、動物標本がもつ多様な形態（仮剥製、翼標本、骨格標本、なめし皮など）や、その作製プロセスに深く踏み込み、各形態の標本がもつ長所や短所を議論しました。また、動物標本に込められた背景や文化的ストーリーを掘り下げることで、単なる技術習得にとどまらず、博物学的意義を考察する機会を設けました。

以下に、本コースの受講者の特徴、実施内容、そしてその成果をまとめます。

受講者

受講者の多くは自然史系学問に携わり、鳥類や哺乳類の動物標本を扱う「学芸員・研究員・技師」でした。また、考古学的資料を扱う研究員の方は、遺跡から出土する骨を扱うことがあり、骨格標本の維持管理や遺跡骨の種同定に関心がありご参加されたとのことでした。日常的に取り扱う動物が鳥類のみであったり哺乳類のみであったり、また普段維持管理する標本資料の多くが骨であったりと偏りがあるとのことで、様々な動物標本を扱う本コースにご期待いただき意欲的にご参加されていました（写真1）。

動物標本への知識・経験が異なる受講

者が集まったことで、それぞれの専門性を自然に共有し合える場が生まれました。例えば、標本作製経験の豊富な受講者は、初心者に対して技術的な指導を行い、一方で初心者はその視点から標本作製の疑問や新鮮なアイデアを提供しました。このような相互学習の環境は、本コースの重要な特徴の一つになっていると言えます。

実施内容

本コースでは、動物標本作製の基本技術から製作された標本のマネジメントまでを体系的に学ぶため、実習と講義が組み合わされたプログラムが提供されました。具体的には以下の内容が実施されました。

1. ラットの仮剥製作製

ラットの仮剥製作製を通じて、動物死体の取り扱い方、剥皮の基本技術、体型の整形方法について学びました（写真2）。初心者にとっては、標本作製に必要な基本的な技術を学ぶ貴重な機会であり、経験者にとっては皮膚を損傷させずに剥ぎ取る技術を磨くことが大きな目標とされました。また、経験者は自身の技術を再確認しながら、他の受講者に助言や指導を行うことで、動物体の構造を再認識し、新たな発見を得る場となりました。

2. 鳥類の翼標本作製

鳥類の翼標本作製では、鳥類の薄い皮



写真1 学芸員専修コースの開始。



写真2 受講者間で標本作製の技を学ぶ。

Ouroboros

膚を傷つけることなく剥皮し羽根の整形をする高い技術が求められます（写真3）。鳥類学を専門とする受講者が率先してその技術を他の受講者と共有しつつ、鳥類標本の展示や教育的活用についても議論が行われました。受講者は標本がもつ学術的・教育的価値についての理解を深めることができました。

3. 中型動物の剥皮と骨格標本作製

中型動物を用いた実習では、四肢の末端部までをきれいに剥皮し（俗に「袋剥き」と呼ぶ）、同一個体から全身骨格と全身なめし革の2つの標本を得る技術（俗に「両取り」と呼ぶ）を中心に学びました。この工程では、適切な力加減や解剖器具の使い分けが求められます。また、骨格標本作製の基礎的技術として、効率的な洗骨方法や晒骨手法を学びました。受講者は骨格標本が研究資料や展示資料として完成するまでのプロセスを、

順を追って体験し標本への価値観を深めることができました（写真4）。

4. 中型から大型動物のなめし皮作製

中型哺乳類や大型哺乳類から剥皮した皮膚を用いてなめし皮作製が行われました。この工程では、化学薬品を用いた防腐処理方法、安全な作業手順、皮革の加工技術について学びました（写真5）。また、なめし皮の用途や展示への応用についての議論も行われ、受講者は標本作製がもつ可能性を多面的に考える機会を得ました。

5. 講義と議論、およびバックヤード研修

実習に並行して行われた講義と議論では、動物標本の形態的特性や用途（研究、展示、教育）の違いについて学びました。また、標本を使った博物館の学術表現を抑圧しうる社会的感覚に対する懐疑的視

点（写真6）、標本に付帯する情報群の意義の深さとそれらを効果的に管理する方法が議論されました（写真7）。さらに、標本作製に込められた背景や意図についてのディスカッションを通じて、標本を単なる技術的産物としてではなく、文化的・学術的意義をもつ存在として捉える視点を得ることができました。

各博物館の抱える収蔵管理上の機械的制約を踏まえ、各標本を如何に適切に収集し、保存管理するかについて、当館のバックヤード状況を確認しながら提案しました（写真8）。例えば、収蔵空間を最大限に利用するための配架方法の工夫をご覧いただき、理想的収蔵環境に対してどこまで現実的に応えることが可能かを探り、受講者は自身の所属機関の実情と比較しながら保存管理の在り方を議論することができました。



写真3 繊細な鳥の剥皮に集中する受講者の方々。

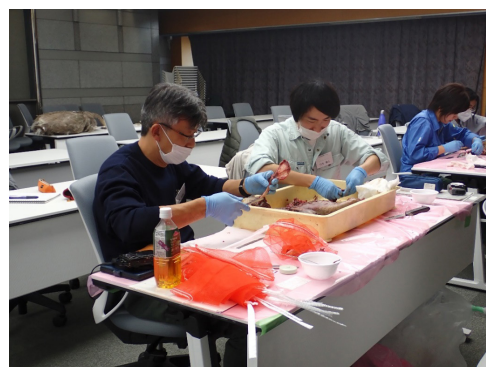


写真4 受講者は共に動物体を探り標本への意識を考える。



写真5 なめし皮作製の様子。



写真6 展示表現の可能性を考える。

おわりに

2024年度「動物標本を探り語ろう」コースは、動物標本作製に関する技術的・学術的知識を包括的に学ぶ貴重な機会となりました。本コースを通じて、受講者はラットや鳥類、中・大型哺乳類を題材に、仮剥製、翼標本、骨格標本、なめし皮の作製技術を習得し、標本がもつ多様な学術的・教育的価値についての理解を深めました（写真9、10）。今回のコース内容について受講者の皆さまからご高評をいただき、特に博物館の運営や資料管理への新たな視点を得たというご意見や、受講者間の活発な情報交換と議

論の場として大変有意義であったとのご感想を拝見し非常に嬉しく感じております。他方で、魚類、昆虫、軟体動物など幅広い分類群を取り上げることや、講師と受講者との議論をより深めることを望まれる声も聞かれました。コース期間内に動物標本を網羅的かつ体系的に理解していただくため、昆虫や魚類など幅広い標本作製技術の実習を取り入れたり、議論を深める座談会を実施したりと、今後もコース内容の充実に努めて参ります。

最後に、本コースの実施にあたり、多大なご協力をいただいた講師の皆さま、スタッフの皆さま、そして熱心に取り組

んでくださった受講者の皆さまに、心より感謝申し上げます。受講者の皆さまと作製した標本を囲みながら、標本作製の難しさや課題を共有し、展示される剥製の活用方法について語り合えたことを大変嬉しく思います（写真11、12）。この研修が受講者の皆さまの標本に対する理解を深め、動物標本コレクションの発展に貢献する一助となれば幸いです。



（本館特任研究員／民族生物学、機能形態学）



写真7 標本情報の意義と管理方法を再考する。



写真8 標本収蔵の理想と実態を考える。



写真9 受講者の作製した仮剥製。



写真10 受講者の作製した翼標本。



写真11 作製した標本を囲み語らう。



写真12 作製した標本を前に撮影した集合写真。

大地とまちのタイムライン 特別企画展示

東京大学コレクション 地質図展

佐々木猛智¹・三河内 岳²

稲葉町×東京大学総合研究博物館連携ミュージアム「大地とまちのタイムライン」では「地質図展」を開催中である。この特別企画展は、地質図とそれに関連する資料を用いて、おもに常磐地方および稲葉町近隣における地質調査の歴史を紹介するものである。展示物は、日本各地の地質図、炭田・油田地域の地質図、常磐地方・福島県の地質図、地質図作成法の解説パネル、地質図の作成過程を示す関連資料、化石標本などである。炭田関係は、北海道手塩、九州唐津、常磐、油田関係は秋田、新潟地域のものを展示した。地質図は、日本各地と福島県を中心に、歴史的に価値の高い地図を東京大学総合研究博物館の地学系部門が所蔵するものから選定した。古いものは明治初期のものがあり、1881年（明治14年）作成の地質図（図1）には御雇外国人「ラ

イマン（来曼）」の名前が記載されている。地質図の作成過程を示す資料では、火山学者久野久博士のフィールドノート、手書きの地質図が重要資料である（図2）。これらの資料は文京区教育センターのスクールモバイル展示でも取り上げたことがある（佐々木・他, 2023）。

常磐地方には2つの歴史的に重要な地質図がある。ひとつは炭田地域の地質調査の初期である1927年（昭和2年）に徳永重康博士が作成したもの、もうひとつは戦後石炭採掘が盛んであった1957年（昭和32年）に地質調査所から発行

されたものである（図3）。徳永博士は、ナウマンゾウ、デスモスチルスの化石を報告したことで知られており、古脊椎動物研究者の印象が強い。しかし、常磐炭田では10年間炭鉱関係の研究も行っていた（徳永, 1985）。1927年の地質図はその成果として出版されたものである。

徳永博士の地質図は、当時の炭鉱の場所や炭鉱鉄道の軌道が描かれている点で興味深い。稲葉町内にある常磐線の竜田駅と木戸駅からは西側の炭鉱に向かって炭鉱鉄道が延びている（図4）。軌道の跡地は現在でも平坦な地形やトンネル跡から確認できる場所がある。当時の炭鉱や炭鉱鉄道の場所を復元することは今後の地域史研究において興味深いトピックである。

地質図は、土壌を取り去った場合に地

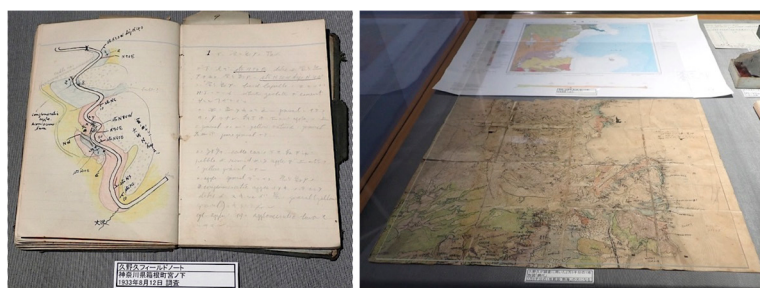


図2 火山学者久野久博士の資料. 左：野外調査の結果を記載したフィールドノート. 右：手書きの地質図（下）と出版された地質図（上）。



図1 明治初期の地質図. 1880～1881年作成. ライマン（来曼）氏調査の記述がある。



図3 常磐地方の地質図. 左：徳永重康博士作成（1927年）. 右：地質調査所発行（1957年）。

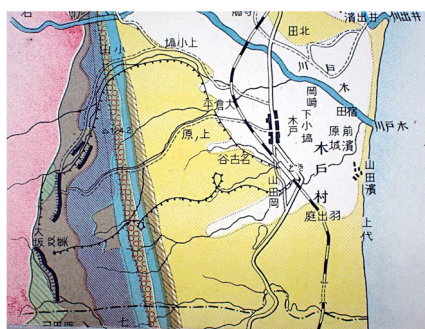


図4 徳永博士作成地質図(1927年)の拡大。常磐線木戸駅周辺。図の左側(大坂、双葉)に炭鉱があり木戸駅まで炭鉱鉄道が敷設されている。

表に露出する岩石や地層の情報を示したものである。土壌で覆われた地下の構造を解明することは時間のかかる作業であり、地質図の作成は現在も日本各地で行われている国家的な事業である。日本の地質の概要は既にかなり理解されているが、細かいスケールでは未調査地域が残されており、未完である。また、過去に調査された箇所についてもデータの更新が必要な場合があり、アップデートが続いている。

化石標本は、常磐地域に関する化石を展示した(図5)。これらは横山又次郎博士によって100年前の1925年に出版されたものである。横山博士はdinosaurに対して「恐竜」という訳語を考案したことで知られており、日本人として最初の古生物学の教授になった人物である。江戸時代長崎にあった通詞の横山家の出身であり、長崎市恐竜博物館に関連資料が収蔵されている。

横山博士が報告した化石標本は徳永博士から提供されたものであることが横山(1923)によって報告されている。徳永博士の檜葉町内の調査地として「龍田炭坑、木戸双葉炭坑、山田岡」が挙げられているが、当該産地の化石標本は残念ながら発見されていない。また、横山博士は日本人として最初に化石を記載した巨智部(こちべ)博士の標本も利用しており(松原・他, 2010)、今回はその中からオオハネガイの化石を展示した。

檜葉町に直接関係する資料として、鯨



図5 化石標本。左: 1925年に横山又次郎博士によって報告された常磐地域の貝化石。右: 鯨岡氏採集の檜葉町・広野町産化石。



図6 檜葉町山田岡に露出する石炭の露头。

岡氏採集化石標本(図5)がある。採集年は1946年、産地として木戸村小山、木戸村大坂、広野町長畑の地名がラベルに書かれている。これらの標本は未研究の古い標本の中に紛れ込んでおり、従来存在が知られていなかった。今回の展示を企画するにあたり常磐地域の化石を整理した結果発見され、檜葉町産の化石が東大に保存されていたことが分かった。

常磐地域には古第三紀の化石産地が多数存在しているが、特に貝化石が多い。この地域の貝化石は親潮海域に生息する特徴的な種からなり「浅貝動物群」として知られている。浅貝層は石炭を含む石城層の上位に位置しており、石炭を探索する際の鍵層として注目されていた。石炭を含む層は樹木が繁茂する環境で堆積していたが、その後の海進によって海産貝類を含む地層が堆積したものと考えられる。

日本における石炭の産地と石炭の形成過程は「大地とまちのタイムライン」の常設展示で解説している。檜葉町、広野町には石炭が地表に露出している場所があり、特に、山田岡の河川沿いの崖には石炭層が明瞭に露出している(図6)。常磐炭田地域は石炭の採掘が終了して

50年が経過しているため、現在野外で石炭が容易に観察できる場所は限られており、貴重な地学教材となるものである。

檜葉町の地質構造は、ほぼ南北方向に走る2本の断層により3つの領域に分けられている。西側は、標高が高く、阿武隈山地の白亜紀の火成岩でできている。中央部は、古第三紀の堆積岩からなり、山側から海側にむかって新しい地質時代(始新世、漸新世、中新世)の地層が露出する。この中に石炭と貝化石含む層が存在する。断層より東側の地域は、さらに新しい時代(鮮新世、更新世)の堆積岩が分布する。木戸川等の河川はこれらの地層を削って流れており、流域には最も新しい完新世の地層が堆積している。従って、檜葉町には白亜紀以降のあらゆる時代の地層が分布しており、地質学を学習するには好適な地域である。

文献

佐々木猛智・三河内 岳・清田 馨. 2023. 東大地質図コレクション展. Ouroboros 27 (2) : 2-5.

徳永重元, 1985. 徳永重康小伝. 地学雑誌 94 (3) : 194-196.

横山又次郎, 1923. 常磐炭田下部化石の略報. 地質学雑誌 30 (357) : 209-212.

松原尚志・佐々木猛智・伊藤泰弘, 2010. 日本人による最初の新生代貝類の記載論文(巨智部, 1883)とその図示標本の発見について. 化石 (88) : 39-48.

⁽¹⁾本館准教授/古生物学

⁽²⁾本館教授/惑星物質科学・鉱物学)

案内 IMT展示

特別展示『台湾蘭花百姿－東京展』
会期：2025年2月15日（土）から2025年6月8日（日）
会場：GREY CUBE（フォーラム）
主催：東京大学総合研究博物館、国立歴史博物館

ニュース IMTイベント

インターメディアテクでは、以下のイベントを開催いたしました。
2025年2月11日（火）講演会『狩り続ける社会のデザイン』－東京大学総合研究博物館アゼルバイジャン発掘調査報告
2025年2月15日（土）シンポジウム『植物芸術－日本と台湾からの視点』

アカデミック・アドベンチャー

インターメディアテクにてアカデミック・アドベンチャーを開催し、以下の学校・団体にご参加いただきました。
・2025年1月31日（金）西東京市立青嵐中学校 中学2年生20名

学校対象教育実験プログラム

インターメディアテクでは、学校対象教育実験プログラム「アカデミック・アドベンチャー」の募集を行っています。学校行事や授業で当館を訪れる小・中学生を対象に、大学生ボランティアが「インターメディエイト」（媒介者）として一緒に展示物を観察・鑑賞し、自由に対話する体験を通じて、子どもたちが自らの好奇心を伸ばし、探求心を深めることのできる創造的な学術探検の機会を提供いたします。

利用日時：水曜日の9時半から12時までの間の約1時間（実施日は応相談、プログラム開始は一般向け開館時間前となります）
利用内容：大学生ボランティアが務める「インターメディエイト」の案内による対話式展示観覧
募集対象：小・中学校の学校団体（国公立・私立は問いません）
利用人数：1団体あたり児童・生徒数4名から60名程度まで
入館料・参加費：無料
申込期限：利用希望日の30日前まで

申込みおよび問い合わせ連絡先：050-5541-8600（ハローダイヤル）

出版

・『台湾蘭花百姿』
発行：国立歴史博物館（台湾）、東京大学総合研究博物館（2025年2月15日）

本館来館者

事前に申し込みのあった主な本館来館者は以下のとおりです（令和6年12月1日～令和7年2月28日）。
星稜高等学校、LJ1205韓国中高生、鹿児島県立錦江湾高校、東京都立小金井北高等学校、行知学園日本語学校高田馬場校、行知学園日本語学校、北京チーム、国際医療コーディネーター協会、清華大学生命科学学院、福岡県立小倉南高等学校、慶應義塾大学文学部民族学考古学教室、昭島市立福島中学校、調布市立第四中学校、早稲田進学館、Ar Rohmah students（インドネシア）、学校法人片山学園中学校・高等学校（敬称略）

ボランティアのご協力（本館）

本館では、2024年12月1日から2025年2月28日の間、下記22名の方々にボランティアとしてご協力いただきました。
飯干ユミ、梅森佐枝子、金子清子、神田理子、越 章夫、佐々木智恵、佐藤れい子、添田禮子、竹内輝子、竹下勝人、兵頭 勝、洲上妙子、船窪英子、古川真由美、保木本利明、星 佳子、細野 剛、水谷浪子、宮崎眞一、柳清 勉、山田節子、柚木陽子（敬称略）

ボランティアのご協力（IMT）

インターメディアテクでは、2024年12月1日から2025年2月28日の間、下記5名の方々にIMTボランティアとしてご協力いただきました。
木村菜結、鈴木 旭、立山華乃、長谷川智也、芳野晴臣（敬称略）

博物館教職員

2024年12月1日付けでYANG QIUYU 技術補佐員が着任しました。2025年2月28日付けで上野恵理子特任研究員が退職しました。

東京大学コレクション未来基金 2024年度寄付者

本基金は、当館が所蔵する400万点以上の貴重な学術標本資料群「東京大学コレクション」を、維持・発展させるために設立いたしました。多大なご支援をいただき、心より感謝申し上げます。基金の趣旨や活動報告は下記ウェブサイトに掲載してございます。何とぞ、引き続き、温かいご支援をお願い申し上げます。

<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt146>

今年度寄付総額 9,595,720円（2024年12月末時点）、寄付件数78件。現在までに下記の方々（匿名希望33名を除く）からご寄付を頂きました。

佐々木道子、木村 肇、小島誠治、平井久幸、木谷謙介、由良貴紀、宮内伸子、細井将右、大出真由美、内山麻子、小川やよい、濱崎源起、瀬戸口久雄、田中風羽、飯塚雅夫、関根吉晃、猪狩ひろみ、香取志都子、叶野美智子、伊藤尚宏、植草薫一郎、佐藤順子、日下部俊文、樋口恵理、竹谷やす（敬称略）

Ouroboros 第82号

東京大学総合研究博物館ニュース
発行日：2025年3月31日
編集人：金崎由布子・佐々木猛智・矢後勝也・海部陽介
発行人：西秋 良宏
発行所：東京大学総合研究博物館
住所：東京都文京区本郷7丁目3-1
郵便番号：113-0033
電話：050-5541-8600（ハローダイヤル）
Fax：03-5841-8451
E-mail: web-master@um.u-tokyo.ac.jp
Designed by Ken Sakamura Printed in Japan
ISSN 1342-3614

本号の内容は本館ホームページ（<https://www.um.u-tokyo.ac.jp>）でもご覧になれます。多くの写真はカラーです。